

大学生の生活科学学習観に関する研究

下木戸 隆 司 [鹿児島大学教育学系 (教育心理学)]

A study on the view of "Life Environment Studies" among college students

SHIMOKIDO Takashi

キーワード：生活科、大学生、生活科教育、学習観

1. はじめに

「体験重視」「個性重視」「児童中心」を掲げ平成元年に新設された生活科が、平成4年度から全面実施されて23年が経過した。当時生まれた子どもが大学卒業して教師になるだけの年月が過ぎたことになる。この間、新学力観、ゆとり教育、PISA型学力、脱ゆとり教育、コンピテンシーなど、学力観や教育観の本質に関わる様々なトピックや課題が取り上げられ、活発な議論が行われてきた。

生活科の現状課題としては「一部に画一的な教育活動が見られたり、単に活動するだけにとどまっていて、自分と身近な社会や自然、人にかかわる知的な気付きを深めることが十分でない状況も見られる」(文部省, 1999)や「学習が体験だけで終わっている」「活動や体験を通して得られた気付きを質的に高める指導が十分に行われていない」(文部科学省, 2008)など、活動や体験が質の高い学びへと必ずしも結びついていないことがよく指摘されている。

生活科は他の教科に比べ、趣旨がよく理解されにくいという意見もあり、教師や子ども達に生活科がどのように捉えられているのかを実際に調査することは、教える側の意図と教わる側の実態とのズレを低減させ、教育活動の質を高めていく上で重要であろう。実際、野田(2004)は愛知県下の公立学校教師に対し、野田・永田(2005)は小学校3年生、6年生、中学校3年生、高校3年生に対して意識調査を実施し、教師と子ども達の双方から生活科が概ね肯定的に受け止められていることを見いだしている。

大学生を対象にした生活科に関する意識調査では、探検活動(植田, 2005)や栽培活動(野崎, 2011)、飼育活動(鈴木, 2006)、自己の成長(根

本, 2014)など、個々の活動に限定されるものが多く、生活科全般に関する認識についてはあまり論じられていなかった。そこで本調査では、教員養成学部で学ぶ大学生を対象に、生活科という教科がどのようにイメージされているかについて吟味する。野田・永田(2005)の結果と比較しながら、大学生の意識が小中高生の回答と同様の傾向を示すかどうかについても検討を行う。

2. 調査方法

調査対象 鹿児島大学教育学部教科教育科目「生活科教育」の受講者に調査を実施し、113名から回答を得た。この講義科目は、鹿児島大学教育学部では教員免許法にある「生活科の指導法に関する科目」に該当するものであり、小学校一種免許状取得の必修科目となっている。

調査時期 平成26年度前期の「生活科教育」の9回目の講義時間を利用して調査を実施した。

調査項目 質問項目は野田・永田(2005)から「教科の好き嫌い」「心に残る生活科の活動」「生活科を学ぶ学年について」の設問を選択した。「教科の好き嫌い」については「とても好き」「やや好き」「やや嫌い」「とても嫌い」の4つの選択肢を設けた。「心に残る生活科の活動」については、「学校探検」「公園や野原での遊び」「家族調べ、手伝い」「休日の家族の過ごし方」「町探検」「町の名人と触れ合い」「公共施設の利用」「乗車体験」「季節の変化への気付き」「季節や地域の行事に関わる活動」「草木遊び」「身近なものを利用した遊び」「昔遊び」「飼育活動」「植物栽培」「収穫祭」「できるようになったこと」「成長の振り返り」「年少児との触れ合い」からなる19の選択肢を用意し、複数回答可とした。「生活科を学ぶ学年について」

は、「生活科はない方がよい」「今のように小学校1・2年だけでよい」「生活科のような教科は〇〇年まで学習できるようにするとよい」の3つの選択肢を設定し、さらに最後のものについては「〇〇年」のところに、具体的に何年生までか記入を求めた。

3. 結果と考察

教科の好き嫌い 「生活科という教科について小学校1, 2年生のとき、どのように感じていましたか」という設問に対し、各々の回答の割合は、「とても好き」が31.9%、「やや好き」が65.5%、「やや嫌い」が2.7%、「とても嫌い」が0.0%であった。「とても好き」「やや好き」をあわせて9割を超え

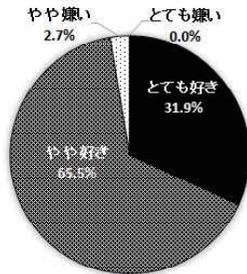


図1 生活科の好き嫌い

ており、大部分の学生にとって生活科が好きな教科であったことが示されている。実際、自由記述の欄でも「楽しい活動ばかりで、学校が楽しかった」「普段の生活のなかではできないことがやれてよかった」「楽しい授業というイメージ」などといった肯定的な意見が多かった。この傾向は野田・永田 (2005) とも一致する。

心に残る生活科の活動 「生活科の学習の中で心に残っている活動は何でしたか」という問いに対し、各選択肢の回答数は以下のとおりであった。「公園や野原での遊び」87名、「植物栽培」87名、「町探検」72名、「学校探検」67名、「草木遊び」62名、「昔遊び」61名、「身近なものを利用した遊び」51名、「飼育活動」50名、「季節の変化への気付き」45名、「町の名人との触れ合い」39名、「家族調べ、手伝い」38名、「収穫祭」38名、「公共施設の利用」33名、「成長の振り返り」25名、「季節や地域の行事に関わる活動」18名、「できるようになったこと」18名、「乗車体験」17名、「年少児との触れ合い」13名、「休日の家族の過ごし方」7名であった。

回答の多かった活動5つを取り上げると、「公園や野原での遊び」「植物栽培」「町探検」「学校

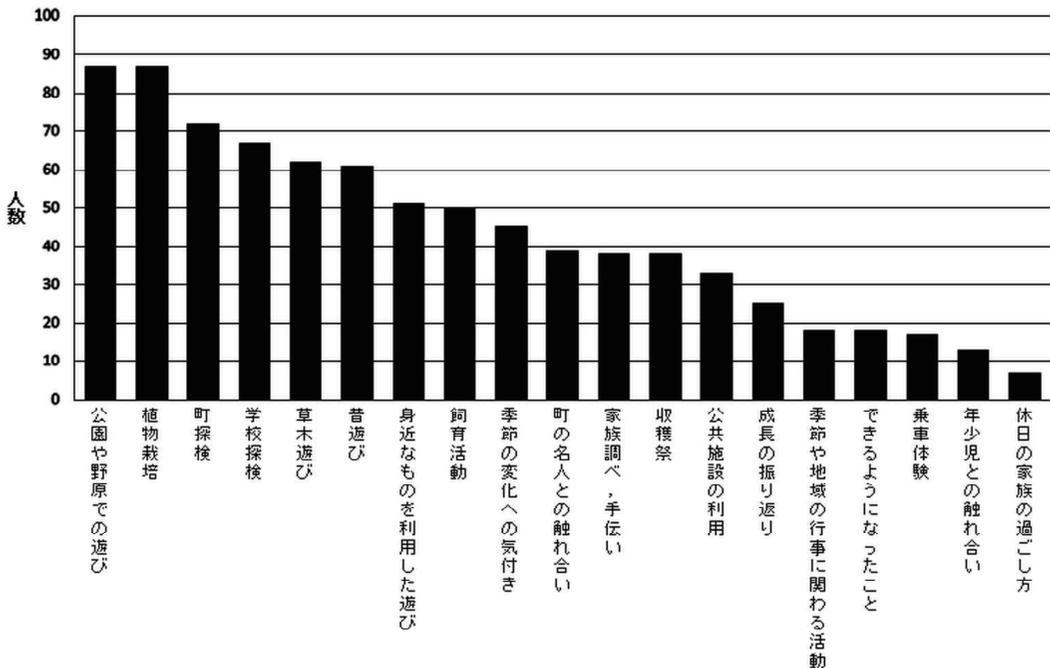


図2 心に残る生活科の活動

探検」「草木遊び」であった。上位5つの内3つは身近な自然を扱った活動であり、幼少期の自然との触れ合いの経験が少なく、とくに印象に残りやすかったのかもしれない。逆に回答の少なかった活動5つについては「休日の家族の過ごし方」「年少児との触れ合い」「乗車体験」「できるようになったこと」「季節や地域の行事に関わる活動」であった。成長の振り返りや身近な人々との触れ合いに関する活動の印象は希薄なようである。

こうした傾向は野田・永田（2005）のものと同様一致しており、自然との触れ合い体験の強さ、鮮烈さを改めて裏付けるものとなった。自由記述では「植物を育てたり、ウサギの世話をしたりしたことはよく印象に残っている」「生き物に対する愛情が自然と感じられたと思う」「自然と触れ合う楽しさを学べた」といったものが見られ、身近な自然との関わりのなかで生き物への親しみ、命の大切さや美しさに気付いたことに言及した者が多かった。情意的な学びを尊重する生活科の特色がよく反映されていると考えられる。

生活科を学ぶ学年 「生活科のような教科がどのくらいまであった方がよいと思いますか」という設問に対する回答率は、「生活科はない方がよい」0.9%、「今のように小学校1・2年だけでよい」85.7%、「生活科のような教科は〇〇年まで学習できるようにするとよい」13.4%であった。最後の選択肢の内訳は「3年生まで学習できるとよい」3.6%、「4年生まで学習できるとよい」7.1%、「6年生まで学習できるとよい」2.7%であった。

野田・永田（2005）の調査では、生活科は小学校低学年だけでなく、上学年まで学べた方がよいという回答が半数以上を占めていたが、本調査では1割程度にとどまっていた。この背景には、本調査の回答者が教員養成学部学生であり、教科

学習の系統性の観点から理科・社会科への接続を重視している者が多かったことを示していると考えられる。いみじくも自由記述のなかにあった「社会や理科の基礎を楽しく学べた」「生活科で学習したおかげで3年生からの理科、社会の学習にスムーズに入っていったと思う」という意見に代表されるように、生活科は理科や社会科の基礎を学ぶものであり、あくまで橋渡しの前座としての認識である。また「ほとんど印象がなく、本当に意味があったのか疑問」「何を学ぶ教科がよくわからなかった」という意見もあり、生活科の特色である、合科的・総合的な学びの意義についてはさほど注目されていないように窺える。大学生のこのような認識は生活科だけに限定されるのか、それとも中学年以降の総合的学習の時間に対しても該当するものなのかについては、本調査では判断材料に乏しく不明である。

4. おわりに

本調査では、教員養成学部の学生を対象に、小学校低学年の当時持っていた生活科という教科に対するイメージを吟味した。これらの結果の解釈に際しては些か注意が必要である。

本調査は、学生に過去（小学校低学年当時）を想起させて回答を求めるものであったため、記憶の欠落や想起の歪みなどによって信頼性が低下している点は否定できない。実際、自由記述のなかには「記憶がほとんどない」「どんなことをしたかほとんど覚えていない」などといった意見が散見された。自らにとって不快な事象は意識されやすいが、それ以外の事象は意識されにくいという「ネガティブティ・バイアス」がもし働いているのであれば、この結果は生活科で不快な事象をさほど経験しなかったことを反映しているものと考えられる。

具体的な記憶が不鮮明であっても「正直よく覚えていないが、自分なりに楽しく学習していたと思う」「どんな活動をしたか思い出せないが、今の自身の生活習慣に反映されていると思う」といったような、大まかな部分で生活科の意義を評価する声も複数認められた。こうした記述は学生の生活科に対する肯定的な認識を改めて裏付ける

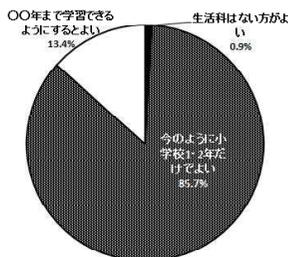


図3 生活科を学ぶ学年

ものといえよう。

しかし一方で少し気がかりな点もある。生活科の諸活動のなかで、成長の振り返りや身近な人々との触れ合い活動の印象があまり残っていなかったことである。人は周りの人々から大切にされ、愛されているという実感を持つことで、自らに自信を持ち、自己を肯定的に捉えられるようになる。近年日本の子ども達における自己肯定感の低さが随所で指摘されていることを考慮すると(例えば、古庄, 2009), 身近な人々からのあたたかな眼差しを自覚し、こうした人達に支えられて自分が生きていくことに気付かせる活動は今日とくに重要になってきていると考えられる。自らが周囲に受け入れられたという実感が、自己の有用性や可能性についての認識を深め、自己肯定感を高めるからである。今後は自己理解や自己の成長をはかるものとして、より多くの人達の記憶に残るよう、心が動かされ、揺さぶられるような活動や体験を一層充実させていくことが必要かもしれない。

最後に、本調査では教員養成学部で学ぶ学生を対象に生活科のイメージについて調べた。結果はこれまでの野田・永田(2005)の報告と概ね一致するものであった。時代や時勢の変化に伴い、教科自体の目標や内容、評価規準が定期的に見直されることを考慮すると、今後も継続して意識調査を行い、過去の結果と比較検討していくことが有用であろう。

5. 引用文献

- 古庄純一 (2009). 日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか 光文社新書
- 文部省 (1999). 小学校学習指導要領解説 生活編 日本文教出版
- 文部科学省 (2008). 小学校学習指導要領解説 生活編 日本文教出版
- 根本芳枝 (2014). イメージマップ表出言語を中心とした生活科教育法受講生の学びの分析と考察 千葉大学教育学部授業実践開発研究室 授業実践開発研究, 7, 81-90.
- 野田敦敬 (2004). 生活科学習の改善に向けての調査研究—愛知県内における生活科学習への教師の意識調査を基にして— 愛知教育大学研究

報告 教育科学編, 53, 1-8.

- 野田敦敬・永田真吾 (2005). 子どもの生活科学習への思いについての調査研究—附属岡崎小学校第3学年・第6学年及びその卒業生への調査を基にして— 愛知教育大学研究報告 教育科学編, 54, 11-18.
- 野崎健太郎 (2011). 植物の成長観察を用いた大学生の科学的素養(科学リテラシー)教育の実践—保育者および小学校教員養成課程における教科生活科での事例研究— 椋山女学園大学研究論集 自然科学篇, 42, 27-33.
- 鈴木隆司 (2006). 生活科教育における飼育活動の授業研究 千葉大学教育学部研究紀要, 54, 93-98.
- 植田和也 (2005). 生活科学研究における学生の意識と教員の支援について 香川大学教育実践総合研究, 11, 117-124.